

再び正L字文を持つ規矩鏡について

原田三壽

はじめに

以前筆者は、京都府竹野郡弥栄町大田南5号墳から出土した青龍三年鏡の内区の正L字文に注目し、その類例を調べ、各資料の特徴を概観したことがある。^(注1)

青龍三年鏡の特徴の中でも特に正L字文に注目し、分析を行なったのには理由がある。それは富岡謙蔵以来、長い間正L字文は仿製方格規矩鏡認定の根拠とされてきたからである。^(注2) 青龍三年鏡は紀年鏡であり、正式な発掘調査を経たものであることから鏡研究の基準資料とし得るが、この青龍三年鏡の出土により中国鏡でもこのような文様を持つ鏡が製作されたことがはっきりしたのである。したがって、逆にこの正L字文を持つ鏡群から青龍三年鏡を考えれば、この鏡の特徴がよりはっきりするであろうし、丹後における古墳時代の研究を深化させると同時に、魏の年号を持つこの鏡の製作地からその背景といった、東アジア的視点で当時の国際関係をも考察していく資料にもできる。一方こうした問題以外にも、正L字文を持つ鏡群の分析を進めることは、仿製方格規矩鏡製作の原鏡を探る糸口になろうし、ひいては倭における鏡製作の問題まで踏み込んでいく端緒となる。^(注3)

したがって、以上のような観点から、前稿においてはまず資料を集めたのだが、発表後筆者の認識不足から、報告者の校正のミスで拓本を裏焼にしたものも資料としているとの指摘を受けた。^(注4) 本稿ではそれを踏まえ、該当資料を訂正すると同時にその後確認した資料を追加し、再度この問題について考えようとするものである。

1. 通常の方格規矩四神鏡と青龍三年鏡の特徴

青龍三年鏡は方格規矩四神鏡であるが、そもそもこの鏡には次のような原則がある。

主文

- 1) 四神鏡の場合、北に玄武、南に朱雀、東に青龍、西に白虎が配置される。つまり、上に玄武を持ってくると、下に朱雀、右に青龍、左に白虎となる。
- 2) 各々の四神像は、TL字文の右側に頭を右に向けて、左回りに回転している。
- 3) TLV文のL字は文字どおりのLではなく、逆のL字形になっている。

4) T L V文の屈曲部は、正しく直角に作られる。

鈕、鈕座

5) 十二支文は、玄武下方の方格上辺中央から始まり、右回りに記される。

6) 鈕孔は、方格の十二支文の子午の方向に開口する。

7) 鈕孔の形は半円形である。

銘文

8) 銘文は右回りに記される。

これらと青龍三年鏡の特徴を比較すると、次のような違いがある。

ア) 四神像の位置と向きが反対である。

イ) 通常の規矩鏡の逆L字文とは反対の正L字文である。

ウ) T L V文の屈曲部がゆがんでいる。

エ) T L V文の凹部が、線状に削られている。

オ) 鈕孔が方格の対角方向に開口する。

カ) 長方形の鈕孔を持つ。

また、これら以外に外周突線は持たないことも注意が必要である。

2. 正L字文を持つ規矩鏡

前稿同様、正L字文を持つ規矩鏡を表にまとめたのが付表1である。その後発見した資料は表を御覧いただきたいが、前稿であげながら削除したものに次の資料がある。^(注5)

- ① 吉林市烏拉街遺址出土 方格規矩四神鏡
- ② 陝西省扶風県揉谷郷陵東村出土 方格規矩四神鏡
- ③ 陝西省扶風県博物館旧蔵 方格規矩鳥文鏡
- ④ 甘肅省慶陽博物館蔵 方格規矩四神鏡
- ⑤ 湖北省鄂城出土 方格規矩四神鏡

これらのうち①以外は、方格内にある十二支が通常の方格規矩鏡の時計回りとは反対の左回りで、文字も逆字であり、銘文も逆字になっている。つまりこれらは通常のものとして逆になっており、拓本を裏にかえせば通常の方格規矩鏡になる。①は写真、拓本とも掲載されるが、正Lの写真の方が裏焼である。

さて付表1のように、資料は30面確認できるが、以下いくつかの点に注目して資料を検討していこう。各資料については諸要素が比較しやすいよう付表2にまとめている。

まずはじめに、方格規矩四神鏡の四神像である。

通常逆L字の方格規矩鏡の四神と同じ位置にあるものに、浙江16鏡、小校鏡、篋齋鏡、

付表1 正L字文を持つ方格規矩鏡一覧

番号	鏡式	出土地及び所蔵	外区	銘文	直径	文献
1	方格規矩四神鏡	河北省北京大营村8号晋墓	鋸+鋸+鋸+圈線	青同之竟明且好、□□長生買者□	15.2	文物83-10
2	方格規矩四神鏡	河北省撫寧県留守營鎮馬庄村	鋸+鋸+鋸	なし	15.8	文物春秋91-2
3	方格規矩四神鏡	山東省沂水県城関鎮后古城	鋸+変形唐草	なし	11.5	文物91-7
4	方格規矩四神鏡	北京、湖北、河南等のいずれか	鋸+鋸	尚方乍竟、母得之有山人去羊兮	15.5	江漢考古93-3
5	方格規矩四神鏡	浙江省嵊県	鋸+複波+鋸	尚方乍竟真大巧、上有山人不知老、湯次玉泉食汎棗	18.0	浙江16
6	方格規矩四神鏡	北朝鮮平安南道大同郡大同江面古墳	鋸+流雲	尚方作竟真大罔、上有仙人不知老、湯次	21.5	東洋学報拾五
7	方格規矩四神鏡		鋸+流雲	尚方乍竟成大□、上有山人不知老□	16.0	巖窟249
8	方格規矩四神鏡		鋸+鋸	尚方乍竟真大巧、上有□□□□老、湯次玉泉食汎棗		小校卷15-24
9	方格規矩四神鏡		鋸+複波+鋸	□氏作竟□□□、左龍右虎□□□、二親備具子孫昌、□如公三□樂未、□□		簠齋上31
10	方格規矩四神鏡	京都府相楽郡山城町椿井大塚山古墳	鋸+複波+鋸+圈線	作同竟甚大工、上有山□不知老、服者長生買主壽羊	18.4	椿井
11	方格規矩四神鏡	京都府竹野郡弥栄町大田南5号墳	鋸+複波+鋸	青龍三年顔氏作竟成文章、左龍右虎辟不詳、朱爵玄武順陰陽、八子九孫治中央、壽如金石宜侯王	17.4	現説資料
12	方格規矩四神鏡	島根県安来市荒島町造山1号墳2号石室	鋸+複波+鋸	吾作明竟真大工、□□□□用青同、保子宜孫	19.0	考雜29-12
13	方格規矩四神鏡	京都国立博物館蔵	鋸+流雲	尚方作竟真大巧、上有山人不知老、湯次玉泉食	16.4	守屋四神鏡33
14	方格規矩四神鏡	ハルヴィル蔵	鋸+流雲	尚方作竟佳且好、明如日月□□□、左□青龍白虎、□德□道朱爵玄武番昌		Siren
15	方格規矩鳥文鏡	遼寧省遼陽市三道壕1号墓	鋸+複波+鋸+圈線	吾作大鏡真是好、同出余州青且明兮	16.8	文參55-12
16	方格規矩鳥文鏡	河北～河南	鋸+鋸+鋸	青同之鏡甚大工、上有山人食文	12.8	巖窟262
17	方格規矩鳥文鏡	江蘇省南京市栖霞山付近漢墓	鋸+複波+鋸	なし		考古59-1
18	方格規矩鳥文鏡		鋸+複波+鋸+圈線	吾造之竟□陽、巧工作成文章令君高位、宜侯王子孫千人		古鏡図録中27
19	方格規矩鳥文鏡		鋸+鋸	□氏作竟母少有、服者□□□□、女王□□宜孫子、樂無已		古鏡図録中16
20	方格規矩鳥文鏡	兵庫県朝来郡和田山町城の山古墳	鋸+複波+鋸	なし	15.4	城の山
21	方格規矩鳥文鏡	鳥取県東伯郡羽合町馬ノ山4号墳	鋸+複波+鋸+圈線	吾作大竟好且明、上景未守作意□去不羊子□干□□□長樂天□□	15.2	山陰

22	方格規矩 鳥文鏡	福岡県小郡市津古生掛 古墳	鋸+複波+鋸+ 圈線	なし	13.9	津古生 掛
23	方格規矩 鳥文鏡	熊本県宇土市向野田古 墳	鋸+複波+鋸+ 圈線	青同作竟明大好、長生宜子孫	18.4	向野田 古墳
24	方格規矩 渦文鏡	広東省広州市4023号漢 墓	鋸+複波+鋸	調治佳竟子孫息、長保二親得 天力、傳人后世樂母極	13.4	廣州漢 墓
25	方格規矩 鏡	福岡県春日市須玖岡本 B地点	凹帯	日有熹月内富(不明)憂患樂已 未央	13.9	筑前須 玖
26	方格規矩 鏡	竹内金平旧蔵	凹帯	月熹富、樂母事、日宜酒食、 居而□、□□母憂	11.4	聚英 29-3
27	方格規矩 鏡	福岡市南区老司古墳3 号石室	鋸+複波+鋸	なし	12.9	老司
28	円圏規矩 鳥文鏡	河北省塩山県西田寨村	鋸+鋸+鋸	位至三公九卿侯王	15.5	文物春 秋92-1
29	円圏規矩 鳥文鏡	河北省か	鋸+唐草+圈線	君宜高官保子孫	16.5	銅鏡鑑 賞
30	円圏規矩 四神鏡	ロイヤルオンタリオ博 物館蔵	鋸+複波+鋸+ 圈線	長保子宜孫公至位		欧米

京博守屋33鏡、ハルヴィル鏡がある。浙江鏡が写真では不明なところもあるが、四神の位置と方向は通常と変わらない。一方、青龍三年鏡、椿井鏡、大宮村鏡の四神配置は、いずれもTL文をはさんだ反対側の位置で、通常の四神鏡とは逆に置く。四神の方向はこれも通常とは反対の左方向に頭を向ける。これらと同じ配置を取るものに、山東省后古城鏡、巖窟249鏡、江漢考古鏡、大同江面鏡がある。

鈕座の十二支文に注目すると、青龍三年鏡、椿井鏡は通常の方格規矩鏡と同じように玄武の下方の方格上辺の中央から子が始まり、右回りに展開している。このように十二支が右回りに記されるものは、その他に向野田鏡、浙江16鏡などがある。ところが、十二支文は同じ右回りながら、小校鏡では子の字が通常よりも1つ右にずれ方格の端から始まるために、普通なら子午で鏡の中心を通るところが、寅申で中心を通るようになっている。また、通常と同じ右回りながら京博守屋33鏡は玄武のところに子がなく、本来子のところに西がきており、十二支文がちょうど90°ずれた格好になっている。^(注6)

一方、十二支文が通常とは逆の左回りのものに、簠斎鏡、古鏡図録中16鏡、城の山鏡がある。反対回りながら城の山を除く3面は十二支が正しく配置され子午が中心を通る。ところが城の山鏡は、十二支の方向のみならず文字が上下逆転しており裏字である。また、通常鈕座の十二支は外区側から読むように配置されているにもかかわらず、丑から酉までは内区側から読むようになっているように思われる。その上、小校鏡のように子の開始位置が1つ横にずれ方格の端から始まっている。このように鈕座の十二支文だけでも城の山鏡はかなり特異な存在である。

鈕孔の開口方向に注目すると、通常は十二支の子午線と同じ方向に開くことが多いのだ

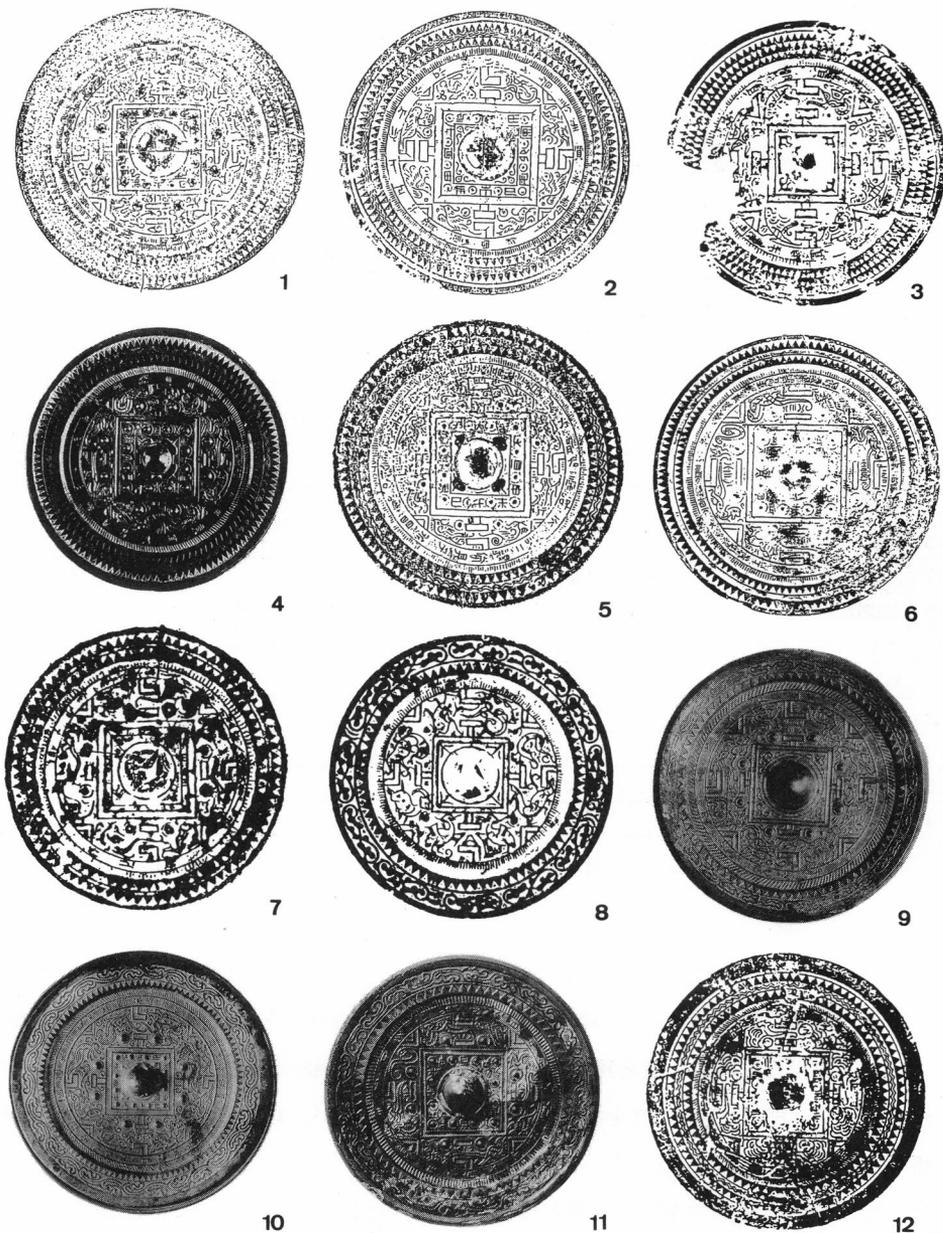
付表2 方格規矩四神鏡の諸要素比較表(○はその要素があることを示す。)

番号	名称	四神位置	十二支文の方向等	子午	鈕孔方向	鈕上	銘文方向	外周突線
1	河北・大宮村鏡	逆	なし		不明		左	○
2	河北・馬庄村鏡	逆	右か	1つずれ?	ずれ?		なし	
3	山東・后古城鏡	逆	なし		不明		なし	
4	江漢考古鏡	逆	なし		不明		左	
5	浙江16鏡	正	右、180°のずれ、裏字	正	子午		右	
6	北朝鮮・大同江面鏡	逆、白虎と朱雀逆	なし		正		右	
7	巖窟249鏡	逆	なし		正		右	
8	小校鏡	正	右	1つずれ	正?		左	
9	簠斎鏡	正	左	正	辰戌		右	
10	京都・椿井鏡	逆	右	正	寅申	○	右	○
11	京都・青龍3年鏡	逆	右	正	辰戌		右	
12	京博守屋33鏡	正	右、90°のずれ	正	卯酉		左	
13	ハルヴィル鏡	正	正	正	正		右	
14	遼寧・三道壕鏡		なし?		ずれ?	○	左	○
15	巖窟262鏡		なし		方格の対角		右	
16	江蘇・栖霞山鏡		なし		正		なし	
17	古鏡図録中27		なし		正		左	○
18	古鏡図録中16		左	正	卯酉		右	
19	兵庫・城の山鏡		左、天地逆、裏字	ずれ	巳亥		なし	
20	鳥取・馬ノ山鏡		右	正	正		左	
21	福岡・津古生掛鏡		なし		方格の対角		なし	○
22	熊本・向野田鏡		正	正	ややずれ		右	○
23	広東・広州漢墓鏡		なし		正		左	
24	福岡・老司鏡		なし		正		なし	
25	河北・西田寨村鏡							○
26	銅鏡鑑賞鏡					○		○
27	オンタリオ鏡	青龍と朱雀逆						○

が、青龍三年鏡、椿井鏡は約45°ほどずれ、方格の対角方向に開口する。このように方格の対角に開口するものに、簠斎鏡、巖窟262鏡、津古生掛鏡がある。また、巖窟262鏡と作行に近い巖窟265鏡は逆し字文を持つ普通の規矩鏡であるが、青龍三年鏡や椿井鏡と同様、方格の対角方向に開口する。

外区文様では、鋸歯文を三重に重ねるものがあったが、それについては前稿でふれた。鋸歯文以外では、京博守屋33鏡、巖窟249鏡、楽浪郡大同江面出土鏡のみ流雲文と鋸歯文を組み合わせた外区を持つ。これらは、いずれも流雲文が通常よりかなりくずれたものであるが、例えば『巖窟蔵鏡』の楽浪出土の方格規矩鏡の中には作行も近く、同様にくずれ

た流雲文を持つものが掲載されており注意を要する。こうしたくずれた流雲文は、製作年代が三国時代まで下がったためなのか、あるいは地域的特色なのかわからないが、今後の検討が必要である。

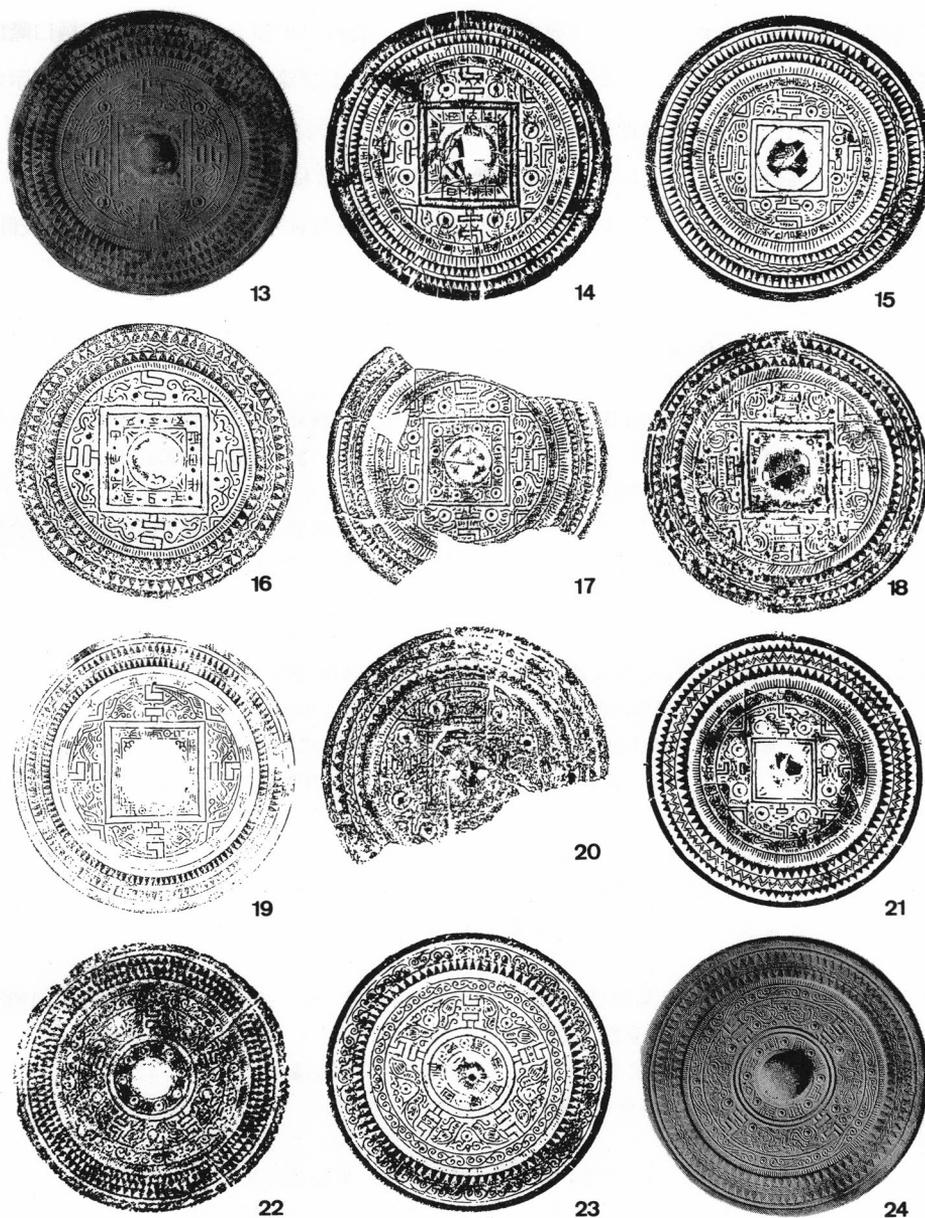


第1図 正L字文を持つ規矩鏡

- | | | | | |
|-------------|----------|---------|-----------|------------|
| 1. 青龍3年鏡 | 2. 椿井鏡 | 3. 大宮村鏡 | 4. 浙江16鏡 | 5. 簠斎鏡 |
| 6. 小校鏡 | 7. 江漢考古鏡 | 8. 后古城鏡 | 9. 巖窟249鏡 | 10. ハルヴィル鏡 |
| 11. 京博守屋33鏡 | 12. 三道壕鏡 | | | |

おわりに

正L字文を持つ規矩鏡を集成し概観してきたが、単位文様ごとに共通点があっても、それに並行して他の特徴でも特定の鏡どうしの関係が確認できるというものになっていない。そ



第2図 正L字文を持つ規矩鏡(2)

- | | | | |
|------------|--------------|--------------|------------|
| 13. 巖窟262鏡 | 14. 古鏡図録中16鏡 | 15. 古鏡図録中27鏡 | 16. 城の山鏡 |
| 17. 馬ノ山鏡 | 18. 津古生掛鏡 | 19. 向野田鏡 | 20. 老司鏡 |
| 21. 広州漢墓鏡 | 22. 西田寒村鏡 | 23. 銅鏡鑑賞鏡 | 24. オンタリオ鏡 |

これは、青龍三年鏡のいくつかの特徴の中でもただ正し字文にのみ注目して資料を集成したためであろうし、特徴の在り方は多様で、正し字文という1特徴のみで分類できるほど単純なものでないのである。青龍三年鏡の製作地及びその背景を推測するためには、青龍三年鏡を単位文様に分解し、その上で関連鏡を集め、総合的に検討する必要があるであろう。

おわりになりましたが、本稿を作成するにおいて、資料の正誤をはじめとして樋口隆康先生に御指導いただきました。岡村秀典氏には新資料および銘文の釈読について御教示いただき、また次の方々にもお世話になりました。記して深く感謝致します。

鈴木博司、高橋美久二、広川守、福永伸哉(五十音順、敬称略)

(はらだ・みつひさ=京都府教育庁指導部文化財保護課技師)

注1 原田三壽 1994

注2 富岡謙蔵 1920 354頁、樋口隆康 1979 296頁

注3 樋口隆康 1995a 99頁

注4 拓本の裏焼については、樋口隆康先生が1994年9月10日、綾部市中央公民館の京都府埋蔵文化財研究会の講演で話されたのが最初である。文献としては、樋口隆康 1995a 99頁、1995b 22頁、福永伸哉 1995 10頁がある。

注5 削除した5資料のうち、⑤は鄂城6の裏焼であり、①～③は樋口先生が執筆者に直接問い合わせ、裏焼であることが確認されており、その上で御教示いただいた。

注5 鈴木博司 1995 91頁

(図版出典)

梅原末治「再び北部朝鮮発見の古鏡に就いて」(『東洋学報』第15巻第2号、京都、1925)

鈴木博司『守屋孝蔵蒐集方格規矩四神鏡図録』(京都国立博物館、1970)

櫃本誠一、山本三郎ほか『城の山古墳・池田古墳』(和田山町・和田山町教育委員会、1972)

高倉洋彰、山口譲二、吉留秀敏、渡辺芳郎『老司古墳』(福岡市埋蔵文化財調査報告書 第209集 福岡市教育委員会、1989)

Oswald Siren: A History of early Chinese Art, II (London, 1930)

塩山県文物保管所「河北塩山発現曹魏五乳規矩鏡」(『文物春秋』1992年1期)

その他の資料の出典については前稿を参照いただきたい。

(参考文献)

鈴木博司「近時雑覧—京都府下新出紀年銘鏡」(『学叢』第17号 89～95頁 京都国立博物館 1995)

富岡謙蔵『古鏡の研究』(1920 京都、1979復刊)

原田三壽「正し字文を持つ規矩鏡について」(『京都府埋蔵文化財情報』第52号 41～46頁 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 1994)

樋口隆康『古鏡』(東京、1979)

「青龍三年四神鏡」(『東方学』第89輯 95～103頁 財団法人東方学会 1995a)

「青龍三年銘鏡に映した古代日本」(『青龍三年鏡シンポジウムの記録 鏡が語る古代弥栄』京都府竹野郡弥栄町編 1995b)

『古鏡』(東京、1979)

福永伸哉「青龍三年鏡と三角縁神獸鏡」(『考古学ジャーナル』第388号 9～14頁 ニュー・サイエンス社 1995)